

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は、非常に大きな津波を伴って、東北地方をはじめとした東日本に甚大な被害をもたらしました。さらに未曾有の原子力発電災害危機にも直面しております。

町民の皆さまにはお見舞金の募金活動に対しましてご協力をいただき心からお礼を申し上げます。また個人や企業からも支援物資や義援金等ご支援いただいております。

町では、被災された方々によりお見舞い申し上げるとともに、災害見舞金500万円を日本赤十字社北海道支部に寄託させていただきました。また、町では次のような支援をしておりますので、町民皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

支援物資

被災地の支援物資受け入れ準備が整った3月19日に、被災者の皆様がすぐに必要となる物資として、災害備蓄品の一部を被災地へ送りました。

消防職員の派遣

道西地区緊急消防援助隊の一員として、せたな消防署大成支署に所属する鈴木救急救命士を3月16～21日まで派遣しました。今後5月3～9日の間も派遣することとしています。

せたな町

被災者の支えに

- 避難されている被災者にお見舞金10万円
- 職員を現地に派遣
- 一時宿泊場所の提供・住宅の確保

東日本大震災

町職員の派遣

被災地域の救援活動を全面的に支援するため、檜山町村会チームの一員として町職員を派遣しています。派遣先は岩手県山田町で4月2日～5月8日までの間、交代で6人の職員を派遣します。また北海道の保健チームの一員として保健師1名を5月8～15日までの間被災地域に派遣します。(職員の派遣は、被災地域の要望に応えられるよう調整いたします。)

お見舞金の支給

先の震災により被災され、せたな町へ避難されてきた方々へ見舞金として1世帯あたり10万円を支給いたします。

一時宿泊場所の提供

北海道の公営住宅等へ入居を予定されている被災地域の方々の、一時的な宿泊場所として、国民宿舎あわび山荘の客室を確保しております。

住宅の確保

被災地域の皆さんで住宅に困っている方たちのため、町では町営住宅30戸を用意しています。この住宅に入居される方たちには、家財道具なども併せて整備し貸与いたします。

その他の取り組み

この他にも、廃校となった二俣・左股・太櫓の各小学校を避難所等としてお使いいただけること、仮設住宅を建設するための用地として、町有地5,400㎡を用意できることを伝えております。



4月7日、高橋町長が仙台市宮城野区から瀬棚区の実家に避難している小川美奈子さんにお見舞金を手渡しました。

■ せたな町の皆さんへ

「感謝の気持ちでいっぱいです」

小川美奈子さん(仙台市)

私が北海道に着き、最初に驚いたのは、「ガソリンスタンドに車が行列していない！」ことでした。仙台では、いつ開くかわからないスタンドに数kmに及ぶ車列ができ、2日間並んでようやく2千円分のガソリンが手に入るかどうかという状況でした。北海道は学校に通う、スーパーに行く、電気やトイレ、ガス、お風呂が普通に使える、子供が外で自由に遊べる別世界でした。

被災直後は、避難所に行きましたが、寝るスペースは無く、体育座りのぎゅうぎゅう詰め、毛布も無く、早々に半壊状態の自宅での生活を覚悟しました。私の自宅はマンションの10階で、津波には遭いませんでしたが、全ての家具に取り付けていた耐震器具が天井を破り、全ての家具・家電

がほとんど壊れました。その時家族全員、職場・学校・保育所にいたので助かったのだと思います。洗濯機が分解し、電子レンジが粉々になり、蛍光灯は根元から折れ曲って割れ、テレビが隣の部屋までふっ飛び壊れていました。片付ける時はあまりのひどさに思わず笑ってしまうくらい家中の物が移動していました。部屋は倒れた家具や落ちた天井でいっぱいになり、部屋の奥にある着替えや買い置ききの食料に辿り着くまで2日かかりました。

■「朝は必ずやってくる」
生出正美さん・真知子さん
(小川さんのご両親)

瀬棚区共和在住

地震のニュースを知ったのは4時半でした。電話をかけた後、1時間間奇跡的につながり「大丈夫、大変なことになってる、電源がないから切る」との言葉。ほっとはしたものの、大きな被害状況をニュースで見て、また電話をかけた。3日目に「家族全員無事」のメールに安心したと同時に、南西沖地震の時のこと、その後事故死した息子の時のこと、あの喪失感に襲われました。この地震で被災者の方々の喪失感は長年続くのだらうと思います。雨のち晴れ、朝は必ずやってくると信じ、毎日被災者の方々のために祈っています。

職員による被災地支援

■「防災意識の大切さ」

産業振興課

課長補佐 鎌田勝幸



■4月1～9日岩手県下閉伊郡山田町に派遣
■4月12日職員に対し報告会が行われました

この度の東日本大震災で、椴山管内から各町の職員が一人ずつ支援のお手伝いをする事になり、第1陣で岩手県山田町に行ってきました。

現地では、県外からの災害支援ボランティアや支援物資を受け入れるためのボランティアセンターを立ち上げる部門に配属され、被災者が困っていることや必要としている物資などの聞き取りや、町内ボランティアを受け付ける出張所の立ち上げなどを行ないました。避難所では、既に3週間経過していたことから所内に自治体のような仕組みが組織され、先の見えないなかで被災者各々が助け合いながら自主運営に向け生活をしていました。

避難所の一つになっていたお寺の住職は、こんなときだから、地域の結びつきが大事であり、みんなで助け合わなければいけない。防災に対しても、昔は「地震が来たら津波が来るから裏山に逃げろ」と小さいころから言われ、みんなが避難していた。今回は海岸沿いに約8mもの防潮堤が整備されていたため安心感から、多くの人たちが、津波警報が出ているのにも係わらず防潮堤の上で海を眺め、その人たちの多くが津波に飲ま



岩手県山田町 町の中心部は津波と火災で壊滅状態

れ命を落とした。と話され、今の人たちの防災意識が薄れてきていることを的確に伝えてくれました。

印象的だったのは避難所の山田南小学校での帰りの際、4歳ぐらいの女兒に「バイバイ」と言ったとき「バイバイじゃいやだよ。」と返され、あらためてこの災害で尊い多くの命や家族の絆が失われたことを実感しました。

私たちも南西沖地震を経験しているものの、時間の経過とともに災害に対する意識が薄れているような気がします。最近特に異常気象が続く

なかで、地震だけではなく大雨や台風などに対しても、常に防災意識持つことがいかに大事か痛感いたしました。1週間という短い派遣期間でありましたが、日頃の防災への意識と普段の私たちの生活がいかに幸せであることに気づかされ、未曾有の大災害となった東北・関東地方被災地の1日も早い復興を願う山田町を後にしました。

4月20日(水)高橋町長が職員の派遣先である岩手県山田町を訪問。この度の被災に対しお見舞いを申し上げ、職員の方々に励ましの言葉を伝えました。



沼崎町長へ、高橋町長から支援の言葉と共に、物資が手渡されました。

消防職員による被災地支援

「緊急消防援助隊 隊員として派遣されて」

せたな消防署大成支署 救急係長

鈴木 豪（救急救命士）



3月16～21日宮城県石巻市に派遣

私は、北海道緊急消防援助隊の二次隊、道西地区隊の一次隊員として3月16～21日までの6日間、宮城県石巻市に派遣され、救急隊員として救急業務にあたりました。

北海道各地区からの大規模な派遣は1回目であり、現地からの情報もほとんどなく、どのような活動となるのか全くわからないまま装備や荷物をまとめ不安を抱えながらの出発となりました。

17日の朝にフェリーが秋田港へ到着し、そこから消防車両で東北自動車道を通り石巻市へ向け出発となりました。車窓から電柱の傾きなど被害の状況が徐々に現れ、だし外の状況を気にしていると、私達の消防車両の隊列に向かい深々と頭を下げる人々の姿が

目に飛び込んできました。中には手を合わせ拜むようにお辞儀をしている人もおり、与えられた任務の大きさを改めて実感し、この時、今まで抱えていた不安が使命感に変わりました。

現地の被災状況は報道である程度分かっており、また、私は北海道南西沖地震の時すでに消防に勤めていて災害活動した経験があることから、ある程度予想することは出来ましたが、実際に目の迫りにすると私の想像を超える凄まじいものでした。現地では、被害のなかった運動公園を拠点として、すでに全国各地の緊急消防援助隊が活動していて、私は救急部隊の一員として活動に入りました。

現地の消防署も被災していて、活動は避難所や被災を免れた一般住宅への出動、仙台市への転院搬送、交通事故や火災など多岐にわたり、一日70～80件の救急出動をローテーションを組み24時間体制で任務に当たるため出動の合間に救急車内で休憩するという状態でしたが、現場では、感謝の言葉をいただき、我々が逆に元気をいただきました。

私が派遣された当初はまだ、一般電話・携帯電話等の通信手段が復旧されておらず、緊急通報は現地の消防団員や警察

官などが中心となり地域を巡回し依頼を受け、消防へ駆け付け通報しているような状態であり、また、我々は現地の地理等が分からないため出動の際は、案内役として同乗してもらった様な状態、現地指揮本部として数百人規模の応援部隊の活動の調整など、自らが被災者である消防関係者等は震災発生後ほとんど休むことなく活動しているとのことでした。

派遣期間が終わりを迎える頃、現地の消防長の「この惨状を広く伝えてほしい。皆さんの活動には本当に感謝している。消防の任務の尊さを再認識している。この度の活動を今後の防災等にぜひ役立ててほしい。」との言葉が伝えられました。私が、私自身この言葉のとおり、消防は地域と密着しており、地元消防にしか担うことの出来ないことは本当に多く、消防の重要性ということをもっと深く認識することになりました。

今回の派遣について、現地での活動という任務は終わりましたが、この経験を広く伝え、防災意識の維持・向上や消防力の更なる充実強化など、災害に対する認識を新たにすることについても任務であると思っています。

防災マップをもう一度

ご確認ください



せたな町では、今後起こりうる自然災害で、町民みなさんが災害発生時に適切に対応いただけるよう、もしもの際に被害が予想される地域や危険区域などを地図に示した「防災マップ」と、災害に対する準備や注意、屋内外のチェックポイントなどが記載された「防災のしおり」を、3月24日の連絡員発送で、皆さまのご家庭にお配りしました。

防災マップには、各地区ごとの津波浸水予測図等を表示しており、また、防災のしおりには、各地域の避難所や防災関連施設の連絡先なども記されており、日頃より目の届く場所に保管してください。

また、もう一度マップとしおりをご覧いただきたいながら、ご家庭や職場などで、もしもの際の避難経路や、避難場所の確認など、お話しされてみてはいかがでしょうか。



※訂正
瀬棚地区防災マップ(津波災害)の避難所より、10番の漁火公園を削除していただきますようお願いいたします。